

イギリスにおける教育への市場原理導入の影響に関する一考察

A consideration about the influence of implementing market fundamentals in education in UK

1K06B117-2 白木 尚彦

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 友添 秀則先生

【序章】

イギリスの教育改革は日本のそれを模範とし着手されてきたということを指摘することができる。筆者は以前、実際に現地イギリスを訪れ、その数は少ないながらも学校教育の現状を目にしてきたが、イギリスの子どもたちが置かれている状況は日本のそれに比べて過酷であると感じた。過酷な生活状況に晒された子どもたちは、頭脳の良し悪しや能力の有無で判断され、時に淘汰されていく。日本においても同様な状況は見受けられるが、イギリスの子どもたちは対処しなければならない困難が多様である。

以上のことを踏まえて、イギリス教育の転換点となったマーガレット・サッチャーによる教育改革に焦点を当てて問題の所在を進めていく。サッチャーによる教育への市場原理導入は、イギリス教育を研究する上で大きな転換期とされている。

そこで、イギリスにおける教育改革が教育界だけでなく、全体像としてイギリス社会に対し如何なる影響を生んだかということについて検証していく必要がある。イギリスにおける教育改革は社会に対してどのようなメリットをもたらしたのか。また、どのようなデメリットを抱えることとなったのかについてを問題の所在とする。

本研究ではイギリスの教育改革がもたらした社会の変容について検討することを目的とする。具体的には政治、経済、文化の3つの視点から、イギリスの教育改革を主軸としながら分析を試みていく。さらにその分析をもとにして、日本における教育に関わる諸問題に対して各々の視点から得られた結果が有用であるかを検討する。

具体的な研究方法として、イギリスの教育改革と、それに関連する政治、経済、文化についての資料をもとにした理論研究を進めていく。

【第1章】

第1章では、政治的視点からサッチャーによる教育改革の概要とその弊害、後の首相による対応を考察した。サッチャーのもたらした教育への政府の介入、市場原理の教育への導入が如何なる結果をもたらしたのか。多くの弊害を残しつつも、サッチャーの行った

改革はイギリスの教育の転換点であったことは間違いない。

それにより、現代イギリスの基盤は作られ、その後教育に視点を据えたブレアに引き継がれ、2011（平成23）年現在でもナショナルカリキュラムやリーグテーブルが存在する。この点で言えば、サッチャーの行った教育改革は功績を残したといえる

【第2章】

第2章では、サッチャーの教育改革後の経済への影響に関して教育的視点を軸に考察を行った。学歴別の年間平均給与総額、インカムタックスの推移、国民所得水準、経済格差を教育経済学の観点から経済指標を用い分析を進めた。教育の市場原理導入の経済的効果は、金銭面の数字だけをみるとすれば好影響を与えているとみることができよう。しかし、個人単位の金銭面をみると、国民全体の平均所得水準よりも上層の家庭および子どもが便益を享受できていたと考えられる。平均的な家庭は子どもに対する教育投資を行う際、家計的に無理をしなければ教育の競争市場では勝ち抜いていけない。つまり、教育を受けるに当たり不公平、不平等を被っている。それが後の経済格差につながっている。

【第3章】

第3章では、イギリスの文化的要素を多民族、多人種という視点から考察を行った。サッチャーは当時、EU加盟国であるフランスやドイツといった国には国家試験があることに對し、イギリスの自由度の高い資格取得の形式では他国に追いつくことはできないと考えた。その結果、ナショナルテストという事実上の国家試験を設け、その対処策とした。しかしながら競争を促すことは生徒の優劣を決定し、サバイバル化をもたらすこととなり、貧困層やエスニック・マイノリティーの生徒の社会的排除の促進につながっている。近年、EU諸国からの人材流入が進行していることで、就労することがより難しくなり、さらなる社会的排除者が増えることが予想される。これらの問題に対し、多文化教育は付属的ではなく、国際競争力の向上とともに二本柱で教育政策を行うことが必要であろう。